

【緑地を楽しむ本】

『名前のない人』

クリス・ヴァン・オールズバーグ 文 村上春樹 訳 河出書房新社



やっと涼しく…という
か肌寒くなってきまし
た。こんな季節に毎
年思いたす本です。

夏から秋に移り変
わっていく頃、山奥
のお百姓のベイリー
さんは車で男をはね
てしまいます。森

の隠者のような不思議な服を着た男でしたが、お医
者に診てもらっても、ケガはなく、ただ記憶を失ってい
るようです。言葉もわからないようで話すこともでき
ません。ベイリーさんの家で、しばらく暮らすことにな
りますが、男はボタンのとめ方もわからないし、あたた
かい料理から立ち上る湯気を見てもびっくりしていま
す。2週間たっても男の記憶は戻らず、しゃべらず、
でもベイリーさんの農場で働き、楽しく日々をすごして
ゆきます。

ある日、男はベイリーさんの農場から北の方は樹々
が美しく紅葉しているのに、南の方は葉が緑のままな
ことに違和感をおぼえます。樹々がみんな赤やオー
レンジに染まったらいいのになと思います。そこで男
が緑の葉っぱを手にとってふうっと息を吹くと…!

その日の夕方、男はベイリーさん一家をぎゅっと抱
きしめ、外へ駆け出して行ってしまいます。ベイリー
さんたちが後を追っても姿は見えません。でも…ま
わりの樹々が美しく紅葉していました。

秋の訪れを描く不思議なお話です。緑地にも「名
前のない人」が来たようですね。

(遠藤)